向陽新聞
高知市塩屋崎町1の2
土佐中・高校新聞部
編集人　水田幹久
発行人　岩田理道
印刷　高知印刷

写真
TEL ⑫6758
大丸東入口前
高橋

六月中に着工か？

建築資金

調達のメドつかず！
やはり半数は移転希望

この六年間うやむやとなっていた新校舎建築問題はようやく現地建築という方針に落ちついた。二月の初めにとった新聞部のアンケートでも、まだ移転を希望する声が根強く残っていたのだが、校長は「理事会で、もはや現地建築と確定した」と言っている。しかし、現地建築には多くの問題点が残っている。たとえば、建築資金として五億円が必要であるが、現在貯金は一億五千万円しかない。そのほか敷地が狭いため、グラウンド、自転車置場、体育館などは今までより広くなる見込みはない事や、一クラス六十人もの〝スシづめ教育〟の改善、工業地域にあるため、スモッグ、煤煙、騒音などの環境の悪さなどが次々にあげられる。

新校舎建築が発表されて、六年間、何ら進展がなかったが、このほど新校舎は現地に建築と決定した。

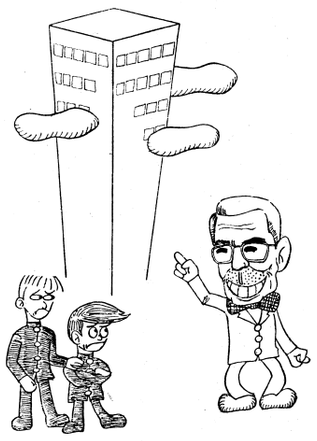
しかし二月の初めに新聞部のとったアンケートによると、約半数（中学四十四％、高校四十六％）の生徒がまだ移転を望んでいる。しかも、現地建築を望む声が特に多い中二、中三の中には「どうでもよい。とにかく早く」という意見がかなり見られた。それに対して移転希望が多い高二の中には、「現地では数々の問題点が生じるのはわかり切っている。それよりあとでくいのない校舎を建てた方がよい」という意見が多かった。学校側も五年間の土地交渉に失敗し、やむなく現地に建てるという感がある。昭和四十一年の新聞部のインタビューでは、校長は「理想の校舎を建てるには市外に出なくてはならないだろう」と言ったが現在では「資金面から考えて、近郊には適当な土地はない。それにあまり交通の不便な所だと入学応募者が少なくなるだろうと思われる。一宮に移転すると言っていた時にも応募者が少なくなるというわさが出た」と言っている。

また、生徒や父兄の意見をあまり反影させずに現地建築を決定したことについて、「正式には父兄の意見は聞かなかったが、一部評議会で七十名ほどの意見を聞かせていただき、学校運営の最高機関である理事会で決定した。これからは部室や体育館、教室など、なるべく生徒の要求をとり入れていきたい」といっている。

しかし、現地に校舎を建てるとしたら、高層建築になるため、本校の弱い地盤を堅めなければならないなど経費がかさむため建築資金として五億円ほどが必要になる。しかし、現在貯金は一億五千万円ほどしかなく、五億円調達のメドはついていない。校長としては、父兄や県などの協力を望んでいる。また、学校債発行に関して西野校長補佐は「協力が得られるかどうか分からないので考慮中である」といっている。

学校側では一月十三日新校舎建築基礎委員会（職員十二人の構成）という会が設置され、定期的に新校舎について話し合っている。この会の目的は教師の立場として改善していきたい事柄を設計に反映するためのものであり、現在専門家の作成した新校舎案を検討している段階である。

校長は「できたら、六月中にも着工したい。設計は今後の新校舎にとって最も重要なことがらなので、十分時間をかけて考えたい。また、新校舎建築は生徒諸君の問題なので、学校側だけで決定するわけにはいかない。現在高校に建築小委員会ができているようだがなるべく早く生徒の要求を出していただきたい。父兄に対しても学校側からのアンケートなどほとぼりないつもりだ」と計画を語った。


「だいじょうぶかなア」

簡素化された卒業式
祝辞は振興会長だけ

二月十四日、季節はずれの暖かさの中で、第四十五回生三百九十二名の卒業式は、来賓の祝辞が祝電の読み上げに変わるなど、全般的に例年より簡素化されたものであった。来賓の祝辞についてはこれまでも「形式的だ」と生徒の間でも不評だっただけに、今度の簡素化は、一般に好ましいこととして受けとられているようである。

式は午前十時の開会の辞より始まり会場は静しゅくな空気につつまれた。つづいて卒業証書授与では西田先生の名目を呼ぶ声に卒業生は頭をたれ感無量のようだった。校長先生は卒業証書を手渡したあと厳しゅくな声で、

「人間というものは、見たり聞いたりでなく実際に体験してその場に追いつめられて、その波乱を通して、その難局を乗り越えた者は確かに何らかの得ることがある…」

と、卒業生に述べた、つづいて大西振興会々長が祝辞、溝淵県知事、坂本市長、高知大久保学長らの祝電が読み上げられた。

そして在校生代表の鈴木直仁君の送辞のあと、それにこたえて、尾崎承一君が卒業生を代表して、

「今の現状では私達の前途にはじっくりと考えるということしか残されていますまい。自己を見つめ主体性を確保し問題の解決へと肉薄していくこの精神をこの三年に体得した貴重な宝として、自己を一そう練磨していく覚悟でございます。

ここに無限の世界へと育つ我らが同期二百九十二名、よし進む道は千差万別であろうとも、よしその道が波乱万丈たろうとも堅く握りあった私達の手は、五十年というさんぜんたる土佐高校の伝統をきづなとして一段と握りしめられることでありましょう。

そして身はいづこにあろうとも我らの心は常にこの向陽の空を乱舞することでありましょう」

と、力強く答辞を述べた。その後卒業生より「リソーフアックス、エックスロータリー、それぞれ一台（印刷機一式）」が寄贈された。

主張
学園の主人公はだれ？

新校舎建築は我々に多くの問題を投げかけた。まず第一に、現地建築決定において、生徒の意向はもちろん、正式な父兄の意向も聞かれなかったことである。

新聞部の二度のアンケートの結果、一回目には移転希望が七十パーセントを越え、現地建築が具体化され始めた後にも高校では移転希望が最も強かった。理由は、設置基準の半分にも満たない現地の狭さ。更に、年々ひどくなる浦戸湾からの公害など、環境の問題が上げられよう。学校側ではこれらについて、何ら具体的な対策も打ち出せぬまま移転を断念したのである。生徒の意向は全く無視されたと言ってもよい。父兄の意見はある程度聞いたと校長は言うが、「とにかく早く」という一部の父兄の声に動かされただけではないのか？生徒、父兄から共にアンケートを取り、両者が移転を強く希望するならば移転は可能か」の質問に対して、校長はNOと答えている。いろいろなことを総合して、理事会で決定したというが父兄の意向も生徒の意向も聞かずに何を総合したのかと言いたくなる。

本校理事会は、校長、川崎、宇田両氏のほか、土電社長稲葉氏、四国銀行頭取前野氏、相互銀行社長岡内氏、入交産業社長入交氏の七名から構成され、重要なことはすべて、この理事会において最終的に決定される。しかし、ちょっと考えてみると、これは少しおかしくはないだろうか。この学校で暮しているのは私達だ。移転すれば交通が不便になって困るのも私達だ。交通が不便でも環境のよい広々とした所へ移りたいと思うのも私達である。土地が狭く、そのために、必然的に教室が狭く、十分な個人用ロッカーが設置できなかったり、すしづめ教室になったりして困るのは私達だ。それが、まるで雲の上のようなところで、私達の知らぬ間に決められているこういった仕組みはおかしくはないだろうか。

もともと学校とは、子供に教育をという親の切実な願いと努力があって立した。教育を必要とする生徒への浸透を大きな目標として掲げている。そのための効果的な宣伝活動を行ない、誰でも参加できる協議会を作り出すことが、新執行部の負う一つの課題であると言えよう。

だが、その際、是非とも必要なのは一般生徒の協力である。教育というものが一方的に〝売り渡される〟ものではなく、また単に受身的に〝買う〟ものでもない、先生と生徒がお互いに影響し合い、お互いに成長してゆく中でこそ、真の教育が行なわれるのだという積極的な姿勢のもとに、一般生徒の多くの参加が望まれる。

既に、現執行部がこの動きに協力し、来年度会長に決定した五藤君（一N）も協議会の定着、一般生徒への浸透を大きな目標として掲げている。そのための効果的な宣伝活動を行ない、誰でも参加できる協議会を作り出すことが、新執行部の負う一つの課題であると言えよう。

だが、その際、是非とも必要なのは一般生徒の協力である。教育というものが一方的に〝売り渡される〟ものではなく、また単に受身的に〝買う〟ものでもない、先生と生徒がお互いに影響し合い、お互いに成長してゆく中でこそ、真の教育が行なわれるのだという積極的な姿勢のもとに、一般生徒の多くの参加が望まれる。

協議会を定着させよ

一年Hホームの提案により、新しく「先生と生徒の協議会」が設置された。お互いの意見を交換し近頃しきりと言われる〝断絶〟を埋めるための絶好の機会である。普段の授業では得られない人間的な交流をはかることも意義深いことに違いない。

だが、この協議会は、ただ単に「お話し合いの会」をめざしているのではなく▼職員会議と生徒間のパイプとなる▼生徒の要求を具体化させ、実現させるための潤滑油的な役割を果たす等、明らかに、生徒の主体性確立をめざしている点において注目に値する。

数年前、執行部によって試みられた「雑談会」と異なり、主に生徒側から、現在問題になっていることがらが提出され、議題があらかじめ発表されるという形式も、実質的な討論が行なわれ易い。

ひとこと

○…高一のあるホームでは二学期の終わり頃から、終礼の時間に有志の刷った歌集をみんなで歌っているそうだ。これは他の全クラスでもぜひ見習ってもらいたい事である。現在クラスの中で、日常はクラスの仲間達と愉快に談笑していても、いざH・Rなどのクラスが一体となるべき時にはまとまりが出来ず、中途半状態で終ってしまうことが多い。討論にしてもクラス全員が参加しようとするふん囲気になる事が極めて少ないクラスのつながりというものはお互いの理解はもちろん、気がねのいらない気持ちから生まれるものだ。歌は気軽に誰でも口ずさめるだけでなくうおいを与え、クラスをひいては学校全体をも明るくするものだ。

○…ややもすると毎日の情性的な生活の中で俗に言う「サラリーマン」が生まれようとしている。いやもうすでにそういった人がクラスにいるかもしれない。そういう方向に傾こうとするのを防ぐためにも歌を歌う雰囲気を作っていく事はいい事だ。中にはてれくさいとか、歌が嫌いだなんてことで、逃避的になるような人もいるがこれは若さがないド。こんな人は一度思いきってうたってみようヨ。

○…歌の種類はいくらでもある。歌謡曲、わらべ唄、賛歌、民謡、ポピュラー、フォークソング etc。それに歌おうと思えばいつでも歌える。（ただし授業中は先生の許可がおりればいいが、それ以外はチト具合が悪い）H・Rの時、休み時間、朝とか終礼の時のホームなどに。ちょっとした事だが、それの持っているものは仲々貴重なものだ。

○…悲しみの歌・喜びの歌、歌は人間の心を素直に表現したものだお互い人間同志歌ってみれば、いつの間にか打ちとけたものができてくる。歌はそんなすばらしい雰囲気を作るものである。こんな雰囲気から、一度も二度もむいてお互いに自由に話し合えるものが生まれるんじゃないだろうか。こういうものはクラスの中だけでなく是非十佐校全体のものへと発展していってほしい。

○…最後になるけれどもう一度。歌は誰もが気軽に歌えるものだ。我々は歌を歌うことによって、これから先、入間関係を又学校生活をより円満快活なものにしていこうではないか。

みなさん是非校内に歌声を！
（H・O）

× ×

校内に歌声を！

どうなる数々の問題点

新校舎は現地建築と決定したがいまだに未解決の幾多の問題が残されている。その中でも特に次のようなことが考えられる。

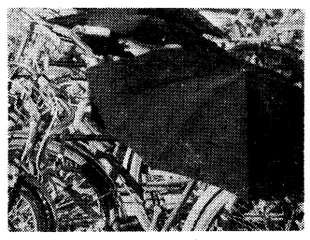
第一に敷地が狭いため、高層にするなど多少の改善を行なってもグラウンドは広くはならないどころか、体育館、自転車置場などの拡張を行なうと、大幅に狭くなる恐れさえある。また現在文化部およびプールわきの運動部の暗く狭い部屋や、化学実験室、技術室などの特別教室の拡張や、ロッカー設置などの生徒の要求を取り入れると、グラウンドはさらに狭くなる。それに対し校長は「生徒諸君の要求はなるべく入れたいが、敷地が狭いため各部全部に部室を設けるのは無理だ」といっている。その上正門前の道路に並んでいる先生方の自動車についても、広い駐車場の必要が生まれてきている。

第二に潮江の工業地域に近いわが校では年々煤煙の公害がひどくなってきている。さらに自動車の騒音も最近とくにやかましい。近い将来これらの公害問題がますますひどくなることが予想され、そのための対策を学校側は新校舎に折り込む必然性が生じている。また、自転車通学者の通学状態は最近の交通事情の悪さにより危険が伴なってきている。特に天神橋、潮江橋を通って来る者は見ていてもとても危い。それらの問題に対し学校側の対策が待たれる。

第三に現地建築となると、建築期間中の授業が問題となる。まず高知商業高校の移転後の校舎を借りいれる事や、今の運動場に新校舎を建て、校舎を壊して運動場を作る。また、一部から順番に壊していき、体育館や特別教室を一般教室として使用していくなどさまざまな案があるが、市商の借り入れは、定時制の生徒の反対もあり絶望的である。また運動場に建てればサッカー、バレーボール、ハンドボール部などのクラブ活動が約二年間できなくなり、また工事の騒音が大きな問題となる。その問題には先生方にも数々の意見があり、高橋教頭は「クラブの者には申し訳ないが、運動場に建てる方がよいと思う。それに工事中特にやかましいことを打つ作業は一週間で終わるそうだ」と言っている。校長は「この問題はなかなかむずかしいのでよく検討してみたい」と言っている。

第四にこの新校舎を期に、現在の学校側に対する強い不信感を取り除き、生徒と教師との相互信頼という本当の教育を目ざそうという声が多い。その具体的な例として教室六十人の〝すしづめ教育〟の改善や生徒と教師が話し合うために新しく設けられた協議会、中高分離に関した数々の問題がある。〝すしづめ教育〟には〝一教室六十人を三十～四十人ぐらいに〟という声をよく耳にする。でも校長は「三十人にすると教室は今の二倍、そして教員の数もふやさねばならない。そうなると授業料にも影響してくる」と言っている。また中高分離に対して西野校長補佐は「もし完全に中高分離をすると、特別教室などがだぶって経営困難となる。だから棟（むね）や正門を区別して、特別教室や体育館などを中央に集めるとよいだろう」と言っている。校長も「中高分離には一長一短があるがだいたい棟だけを分けるようにしたい」と言っている。

以上のことの外にもたくさん問題が考えられるが、すべての面で〝狭い〟という壁に突きあたる。でもこの問題はどうにもならない。だからこの狭い現地において設計をよほど上手にしなければ、容易に解決できる問題ではない。


せまい自転車置場

ロッカー設置
希望が群を抜く

二月十三日に、かねてから生徒の要望の強かった建築小委員会が発足した。高一を中心に、高一から一クラス三名ずつ、高二から一クラス一名ずつの構成である。

現在までに二回の小委員会を開き、各クラスで新校舎への要望を討議してもらい、それに基づいてアンケートを作成し集計した。その結果は次のとおりである。

新設を望むもの

A　各設備

①個人用ロッカー…八百四十五
②冷房完備……四百四
③暖房完備……三百九十六
④各教室にテレビ…二百四十四
⑤エレベーター……二百四十一
⑥教室に防音装置……二百四十
⑦屋上に時計台……二百二十七
⑧各教室に時計……二百十一

以下、教室を階段、非常階段、庭園に噴水、換気せん、足洗い場、一部階段教室、数ケ所に生徒用テレビ、音響効果の音楽室、音楽室にオルガン六十台購入の順序（以下略）

B　各教室、部室、館

①一般生徒用の体育室（卓球など）……五百三十五
②喫茶室……四百三十九
③LL教室……四百十七
④シャワールーム……四百十五
⑤パン販売所……三百五十八
⑥映写室……二百九十四
⑦生徒会館（部、売店などを含めたもの）……二百八十四
⑧武道館……二百十一

以下、遊園地、各グループの実験室、生徒会館（生徒自治の総合会館）寄宿舎、浴場、集会室（委員会用、一般用）、スケートリング、学校銀行（授業料の前払いなど）の順（以下略）

改善を望むもの

A　拡張

①食堂……八百四十三
②体育館……六百七十六
③便所……五百七十四
④グラウンド……四百四十八
⑤教室……三百八十六
⑥図書館……三百四十二
⑦庭園……二百六十八
⑧女子更衣室……二百五十三

以下、売店、プール、自転車置場、体育館と講堂の分離、特別教室、特別教室の中高分離、廊下階段の順（以下略）

B　施設不充分のため改善を必要とするもの

①食堂のメニューをふやす……五百四十九
②食堂の店員を増し、窓をふやす……四百十八
③プール設備近代化……三百十八
④校内放送の充実……三百四
⑤実験設備の充実……三百二
⑥庭園に芝生……二百九十一
⑦売店の商品の種類をふやす……二百十七
⑧図書館の書籍をふやす……二百十七

以下、手洗いと鏡、水道の本数をふやす、掃除用具をふやす、手洗いはタイルで、庭園に話し合いの場所、図書館に新しい本の購入、庭園にベンチの順（以下略）になっている。

このアンケートを高校、中学で比べてみると、新設の（A）では中学はエレベーター、テレビが上位にあり、高校では音響効果音楽室、湯と水の使用できる手洗いが上位にある。（B）では、中学でスケートリングが上位にあるのに対して高校では、集会室、生徒会館がはるかに上位に来ている。改善の方では、中学ではプールが多くあげられているのに対し高校では、庭園がそれに代っている。

また、同小委員会では、各クラブに対してアンケートをとっており、十八の部の回収が行なわれた。それによると、すべての部に部室の設置あるいは拡張の要求が非常に強く、特に運動部には雨天練習場や、グラウンドを広くしてほしいという意見が多かった。一方学校側は「体育館を二階にし、一階に食堂や売店などを置きたい、しかし、すべての部の要求を満たすのは不可能である」と言っている。

土佐校と卒業式 ⑨

最近の雨天続きで節水の声はまったく聞かれなくなったが、本校が我々に〝無料飲料水〟として提供してくれている水道や電気にかかる費用もなかなかバカにならないものである。

まず水道代であるが、料金の値上げもあって、今年は大幅に増えている。四十三年度には十九万四千四百九十円であったのが、四十四年度は三十六万四千八百三十五円と、約二倍になっている。一方電気代の方にも三十八万六千三百四十四円を使っており、合わせて七十五万千百七十九円にもなっている。天文学的数字とまではいかないが、向陽新聞の一行を費やさなくては金額を書くことができないのである。

この金額、一人あたりにすると約二百十七円になる。これからは、せいぜい水もありがたくいただくことにしよう。

また、一部員の家庭の場合とくらべてみると、電気代は彼女の家のおよそ二十三倍、水道代となる八十一倍にもなる。なにも彼女の家庭の生活水準が低いのではない。ちなみに、彼女の家では今年の一月には水道代は四百九十円、電気代は二千百二十六円を使っている。

今年も優秀な成績

四十四年度の県児童生徒文化賞に、団体で本校中学野球部が、個人では長尾和威君（三C）と広井護君（三D）が選ばれ、去る三月三日、県文化会館で表彰を受けたもの。

また広井君は作文コンクールで全国一位文部大臣賞を獲得するという芸術部門での功績が今度の受賞につながったもの。なお、広井君は文部大臣賞・文化賞共に二度目の受賞である。

中学野球部顧問岡村先生談

四国大会では、バス旅行の後でみんな疲れていたが、勝とうなどと考えずに楽な気持ちでやったのがよかったようだ。今の中二のチームは力の点では前チームにまさっているので期待がもてると思う。

同前主将中町君談

県体で優勝した時は、春の大会では予選でまけていて、勝つとは思っていなかっただけに本当にうれしかった。ぼくら達のチームはずばぬけてうまい者はいなかったが、全体的にまとまっていたと思う。現在の中二にもがんばってほしい。

長尾君談

うれしい。水泳は中学生になってから本格的に始めた。監督をしている父がトレーニングをしてくれたが、とてもこわかった。高校にはいっても、インハイ等でがんばっていい記録を出したいと思っている。

広井君談

文部大臣賞・文化賞と二回ずつもらって悪いみたいだが、うれしい。もっと作文や読書指導をほかの教科にもとり入れてもらいたいと思う。

ひとくぎり

「あちらこちらと我々の目につく限りにおいてもいくつかの学校が新しい校舎を落成した。そして、我々はその毎に、それらの学校に対して、ある種の羨望感を抱いたものである。我々の学校にも新しく校舎を建築するチャンスがめぐり来たって、工事が始められ、着々と進歩し、我々の労働の所産をも含めて、美々たる校舎が姿を現わすに至った。そしてその校舎はおおむね理想的である」▼新校舎は、青写真すらまだ発表されていないのだから、すいぶんおどろいた人もいるだろうが、実はこの文章、昭和二十四年の向陽新聞第三号にのせられた論説の冒頭なのである。この年の三月十日、新校舎（現在我々が勉学にいそしんでいる？この校舎）の落成式が行なわれた▼この時から二十一年の歳月は流れて、現代の我々も、「土佐女子校は西日本一の体育館を建てた」とか「市商は近郊のすばらしい土地に移転する」とか聞くと、やはり羨望の気持ちを抱かずにはいられなくなった。そして長い間待たされた我々にもやっと新築のチャンスがめぐって来たわけである。まさに〝歴史はくりかえす〟▼ところで、昭和二十四年に新築される以前からの建物で今も立派に使用にたえているものがある。冬場はいつも雨水をたたえているだけのあのプールが、実は戦前に建てられて、戦災にも焼け残ったものである。建築当時は周囲が鉄柵で囲まれていて、なかなか立派なものであったそうな。ところがその鉄柵、戦時中に取り上げられて砲弾となってしまった。その跡に切り取られた鉄柵のもとが、ちょこんと頭を出している。二十余年間の風雨ですっかり赤くなってはいるが、なかには先のとがったものもあって、素足で踏みつけるとけがをする。とんだ所にとんだ戦争の跡が残っていたものだ▼こんな取るに足らないような小さな問題から、もっと大きな問題まで、いろんな不平不満をたくわえたこの校舎も、もうすぐ姿を消す。しかし、妙に感傷的になることはない。ましてや、不平不満が一挙に解決するなんて考えると大間違いだ。新校舎の方にも不平不満の種は山とあるのだ。そもそも土地がせまい。環境が悪い。煤煙に汚された空気を毎日吸い、たまにはすし詰め教室から出て思い切りあばれたくても、ねこの額程のグラウンド。これでもやっぱり〝君国の恩に報ずる〟人間を育てゆくというのか。（M・I）

中華料理
龍園
高知市梅ノ辻57番地
電話㊸5271番

土佐名産サンゴと
装身具は
池田サンゴ店
高知市帯屋町一丁目
TEL ⑫0358

土佐高・中学校推薦店
かばん・ハンドバッグ・旅行用品
トミヤ
高知・京町　TEL ⑫3418

〝土佐名産〟
特産〝金波〟
立石（重馬）蒲鉾店
高知市京町4
大丸東側　TEL ⑫6279
（野村証券北隣）

少ない生徒の関心

文化部　合同発表会行なわる

二月四日より七日まで及び二十四日より二十七日までの二回にわたって、熟行部の主催により高三の教室を主会場に文化部合同発表会が行なわれた。しかし、一般生徒の関心は薄く、観覧者も少ないままに幕をとじた。

この発表会は、文化祭が二年に一回となったことのうめあわせとして行なわれたもので、沈滞ぎみといわれる文化部の活動に〝カツ〟を与え、活動の活発化をねらったもの。以下は主な部の展示風景

放送部　いつもはクラシックの名曲しか聞こえて来ない音楽室から「巨人の星」「タイガーマスク」といった、テレビでおなじみの曲が流れてくる。二台のスピーカーをすえつけレコード音楽を流すステライトスタジオだ。各部門ごと部員が交替でユニークなディスクジョッキーをひろうした。

化学部　〝恐怖と化学〟と題して加物の研究を発表。中一部員が、清酒のはいったとっくりを片手に何やらやっている。何事かとよく見ると清酒に含まれているサルチル酸の検出実験とのこと。ここ化学実験室は、今度の発表会の主会場である高三の教室から離れているため、観覧者は特に少ないようであった。部長の斎藤君は「なぜ会場に高三の教室をくれなかったのか」と不満をもらしていた。

物理部　ここでは無線装置の展示や実際の交信などが行なわれた。特に、真空放電の実験やオシロスコープによる音波の測定は生徒の目をひいていた。テープを逆回転させての、なんともつかない奇妙な音楽は、会場のふんいきを一種独特のものにしていた。

生物同好会　チクロの検出実験や葉脈標本の作成を実演。できた葉脈標本はしゃれたアクセサリーとして生徒にも配られた。また貝類の研究でその名も高かった故中山駿馬先生の貝の標本も展示された。

コーラス部　いつぞやの名誉ばんかいとばかり猛練習をかさねていたコーラス部。音楽室にかまえられた特設のステージいっぱいに生徒を集めて、なかには立ち見の者も出るなどなかなか好評のようであった。（写真）

気象部　ここの展示は台風が中心で、台風のでき方の説明や天気図が壁いっぱいに張られていた。体育の西田元彦先生も部員の熱心な説明に聞きいっておられた。また大きな地図には台風の進路がかれてあり、スイッチを押すと各都市の位置が光るしくみ。〝天気図の書き方〟というパンフレットも配られ、部員は宣伝にほん走していた。

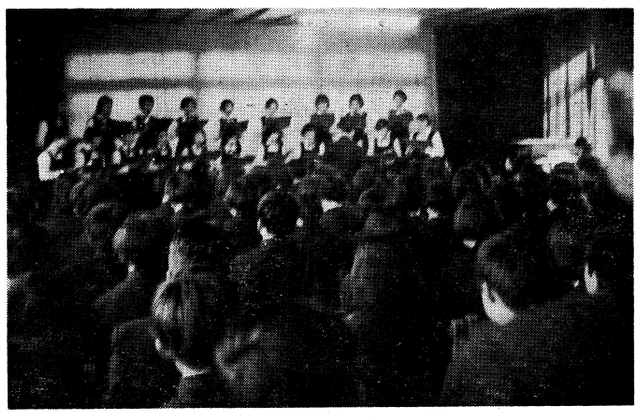
天文同好会　〝人類の偉大な飛躍〟がテーマで、アポロの月着陸を中心に日本など各国の宇宙開発に関するものを展示。「ピー、ディスイズヒューストン…」という例の交信の模様も聞かれた。雨がさを大きくしたようなドームの下ではプラネタリウムの投影。スライドの映写も交えながら「えーとあっ、これこれ、この星雲は…」と四季の星々を紹介していた。

文芸部　暗幕をはりめぐらして太平洋戦争の記録フィルムを上映。スピーカーからはアメリカの軍歌が繰り返し流され、文芸部の展示にしてはおかしなふんいき。ある部員は、このフィルムによって戦争を生実発するのだと言っていたのだが。ラストシーンでは、米兵に銃口を突き付けられた日本兵がはだかのまま両手を上げて現れ、日本の降服を象徴していた。

PFC　世界各国と交通によって交換したパンフレットが色とりどりに展示され、会場は花やかなようそおい。しかし、これといった展示物は見られなかった。

以上今度の発表会全般について「どこの部も間に合わせ的な展示が多かったみたいな。それから、生徒の無関心ということをすごく感じた。熟行部の宣伝不足ということもあったろうか。けれど、なにより文化部目体の活動不足が原因だと思う」と生徒会長の森沢正博君は言っている。

文化部の活動が沈滞ぎみだから自然に生徒の関心も薄らいでゆく。そして、生徒の無関心が文化部活動をますます沈滞させているということらしい。この悪循環を断ち一般生徒の関心を高め、それを文化部活動の活発化へと結びつけて〝良循環〟へともってゆくには、どのような発表会を行なってゆけばよいか、これが今後に残された課題と言えよう。



盛況だったのはコーラス部だけ

問題残したまま

「筆山」42号発行さる

内容をめぐって問題となり、一時発行停止処分のとられていた文芸誌「筆山」第四十二号が、二月二十六日やっと発行された。さまざまの波紋をなげかけた「筆山」発行停止問題も、これでやっと一段落ついたわけである。しかし、問題の谷岡康則君の評論〝戯言〟は掲載を次号にゆずることになっており、この問題は今後なお長く尾を引くものと見られている。

事の発端は、文芸部顧問の西本先生が印刷費など会計上の調査のため印刷所におもむいた事に始まる。その際、「筆山」第四十二号の原稿を偶然発見し、内容に目をとおして、問題の多い文章のあることを知った、と西本先生は言っている。

こうして学校側の発行停止処分がとられた。これに対し、文芸部は抗議のビラを張るなどした。また、谷岡君らは学校側の不当な介入だとし、校門で三十時間ハンガーストライキを行なおうとして、寝袋などが持ち出されたが、結局父兄・学校側の説得によりハンストは校門では行なわれなかった。

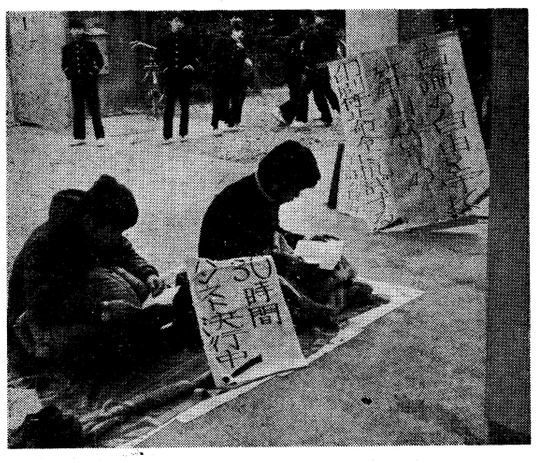
その後、西本先生ら学校側と文芸部との間でたびたび話し合いがもたれた。そして、文芸誌としての「筆山」のありかた、クラブ活動における学校側の指導のありかたなどについて議論がなされたがついに決論は出ず、この問題は年を越すこととなった。

この間文芸部側は、文芸誌ということにこだわらず、広く生徒の意見をのせる「筆山」にしてゆく方針だとのべた。これに対し学校側は、谷岡君の評論〝戯言〟の一部に事実誤認など問題のあることを指摘し、その部分を削るならば発行を認めると一歩譲歩した条件を出した。（註参照）

三学期が始まってからの交渉で谷岡君は「学校側の指摘する部分については書き直しをするから、書き直した文章について発行を認めるようにしてほしい」と要求。西本先生もこれを了承し、「書き直した文章を持って来れば、それを職員会議などで審議して発行を認めるかどうか決めてゆく」と語った。文芸部は、〝戯言〟の書きなおしができるまで「筆山」四十二号の発行を延ばすことはできないとして、今度の発行に踏み切ったわけである。

文芸部部長の藤崎君は「筆山」四十二号の編集後記に「四十二号がいよい上世にでることになった。学校不当介入があったため、発行が遅れていたが、ともかくもこれ以上本号をこげつかせてはならない。周知のとおり、評論はどこまで許されるのかが問題となるだろうが、これから先いろいろな場所で明確にされそうである。四十三号はぜひ飛躍し、多方面にわたり土佐校生全員のためのものとしたい。諸氏の投稿をまつ」と書いている。

（註）〝戯言〟の内容
一、序章
二、頭括として
　主体性とはその神話性
三、高校生（パロディ風に）
四、対話伝達についての一考察
五、後書き
　今思うこと
これらのうちで、藤本教育長の批判を書いた三の高校生（パロディ風に）及び、五の後書き――今思うこと――が特に問題となった部分である。



昨年十二月十七日のハンスト風景

否決された廃止案

生徒委員会をめぐって

去る一月二十二日の生徒委員会において、議長団の辞任要求が議長から出された後、高一議員より生徒委員会廃止動議が提出され各クラスでも討議が行なわれたが、その後の全校投票の結果反対三九人をもって否決された。

議長団の辞任要求の理由は、七回に及ぶ流会、将来の運営困難などであった。これに対し高二の議員より「責任は議長団だけにあるのではない。生徒議員も単に事務的に過ぎない者もいるしまた、一般生徒は無関心な者が多い。だからここで委員会というものを再考する必要がある」との発言があった。その後いろいろと討論されたが、反対過半数をもって否決された。

その後新たに「委員会、生徒間のコミュニケーションの不徹底などによる生徒委員会孤立化の現状では、委員会を廃止して、新しくそれにとってかわるべきものを作る必要がある」として委員会廃止動議が一〇より提出された。突然の提出にもかかわらず、賛否両論、今後の具体策などが述べられ論議がふっとうしたが、その日は結局結論が出ず、そのまま休会となった。

次の一月二十六日の委員会では高二の議員より提出された改革案に焦点があてられた。「グループ形成し、クラスの集合が生徒自治を構成する」というものである。この日の会では、廃止案とこの案及び今後の生徒委員会のあり方について各クラスで討論し、その意向を調査するということで休会となった。

二月五日には各クラスの討論報告が行なわれた。この結果をまとめてみると、廃止案については反対の方が多く、また今後のあり方として先の案は理想的とするクラスがあり、現実的な案としては次の様なものが上げられている。

○議員のクラスへの報告を徹底する
○委員選出法を考慮する
○傍聴者に発言権などの権利を与える

などである。それからこの報告で注目されるのは、やはり無関心層が多いという事であろう。

クラス討論の後高校生全員を対象に廃止案に賛成か反対かを全校投票で調査しようとの案が出され可決された。全校投票の結果は、反対三三九、賛成一三六、棄権一六九で結局廃止案は否決された。

この投票の後、議長の小川君は「廃止案については、廃止後の具体策が明確でないため同調はできなかった。僕は現在の生徒委員会であれば解散が適当ではないかと思う。それから無関心層の事だが、現状では大学が存在する限り、これらは減らないと思う。しかし今後の具体策を確立し、少しでも早く生徒委員会と生徒の連帯感を作るための努力は怠ってはならないと思う」と語っていた。今度の廃止案の問題で廃止反対者の中には、現状を向上させようという積極的な者より「廃止で心気一転なんでめんどうだ。それより現状維持の方が…」という事なかれ主義者が多かったようだ。今後は前件の案などを考慮してこのような無関心層をいかにしてなくしていくかが問題とされている。

〝先生と話そうよ！〟

成功だった第一回協議会

去る二月十六日、熟行部の主催により「先生と話そうヨ」と題して、先生と生徒の協議会が催された。

話題には「喫茶店・ボーリング場の開放」と、現在、生徒委員会の議題として取り上げられている一職員会議の公開」についての二つが予定されていたが、時間の関係や、先生側の要望により「職員会公開」の話題は次回の協議会まで持ち越されることとなった。参加者は生徒およそ二十名、先生十数名と割合に多く、初めての試みとしてはほぼ成功したようである。

協議の内容は熟行部機関紙「足十号」におおむね掲載されたが、主に喫茶店の是非について議論が交された。先生方の中でも「時代の流れということは大事だ。私達が学生の時には映画も許されなかった。明るい喫茶店やバーラーなどは許してもいいのではないだろうか」「生徒と話す場所がなくて困ることがある。喫茶店など対話の場として適切ではないか」等々、進歩的な意見の出されたことが注目される。

この〝協議会〟は一月の下旬ごろ、一年Hホームでクラスの委員会から提案され、クラス討論の結果、学校側に要求されたもので、二月五日、一Hの有志と特活部の先生方の話し合いの結果、毎月定期的に開催することが決定されたもの。なお、熟行部がこれに協力する方針を取り、第一回目から熟行部の主催で行なわれた。

一年Hホームのまとめた協議会の目的は▼生徒と教師の間の話し合いの場を確立し、お互いの意見を交換し、交流をはかることによって相互理解を深める▼職員会議と生徒の間のパイプとなり、生徒の要求を具体化させ、反映させるための潤滑油となる▼土佐校という共同体をより効率のよい共同体とし場合によっては生徒と教師の総合的な意志の決定をはかる。

チャリティーコンサート

収益は盲学校へ

本校の合唱部や吹奏楽部それに高知市の合唱団「フラワーソング」その他の協力を得て、インターアクトクラブ主催の第一回チャリティー・コンサートが二月十五日中央公民館で開かれた。

インターアクトクラブは四十三年六月に発足し十一月正式に認証されたもので、県下で初めてのものである。奉仕活動を通しての社会への貢献を目的として高知南ロータリークラブの協力により結成された。現在十六名の会員がおり今までは校内の備品補修・昇降口の掃除、鏡川の清掃など地味な活動を続けていた。

このチャリティー・コンサートも奉仕活動の一環でこれからは毎年開くそうである。

プログラムはまず本校のグループ〝ミステリーナイン〟の演奏する〝カムインホウムベイビー〟で幕あけとなった。つづいて〝ベストスリー〟・〝バニラクリーム〟などの演奏が行なわれ、約四時間の間ポピュラーやフォークソング、日本の歌など幅広いレパートリーをくりひろげ、約六百人の観客もいっしょになって楽しんでいた。楽屋裏では「フラワーソング」が時間になってもこないので、あわてて前のグループにもう一度同じ演奏をしてもらうなどのエピソードもあった。

利益金の約五万円は高知盲学校のくすのき寮に寄付し、楽器を買ってもらうそうである。

会長の北川素君は「このクラブを人間形成の場としてより充実させてゆきたい」と話していた。

春はすぐそこに…

このほど体育担当の西田晃子先生が、結婚なさることになった。相手の方は愛媛県出身の佐伯哲夫さん。佐伯さんは現在広島におられ、職業はエンジニア。お二人は先生の伯父にあたる方のお世話で知りあわれたそうだ。第一印象は誠実で実行力のある人ということで、仕事に対する情熱にひかれたとか。

式は広島で三月三十九日に行なわれる予定。

「暖い家庭をつくって、従順でありたい。」

とおっしゃる先生は、幸福そのものである。

なお先生の新しい住所は、次の通り。

広島県賀茂郡八本松町1119
石徳工業社宅内

× × ×

昨年本校に赴任していらっしゃった理科の浜田俊充先生は、このたびめでたく武内郁子さんと結婚されることになった。

武内さんは、目下お家で花嫁修業に専念していらっしゃる二十四才のお嬢さん。二学期頃から浜田先生がきれいな女の人と一緒にはりまや橋付近にしばしば出没(?)している、といううわさが流れていたが、お話によると二人は八月に知りあわれ、うわさの流れた十一月にはすでにご婚約が決まっていたそうだ。その間の経過をうかがってみたが、

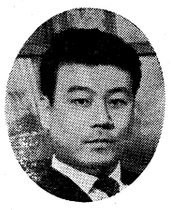
「ただなんとなく、なんとなく。」とおっしゃるだけ。

挙式は四月一日、土佐教会で行なわれ、そのあと伊野町の新居におちつかれる予定である。

先生出番です

『土佐校二十年』

元吉和雄先生



温故知新。今を去る二十年前の土佐校、それは酷いバラック建ての校舎で、晴天の日は、屋根の穴からもれる陽光が幾条も黒板に斜線を引き、又雨の日は雨の日で、傘を片手に授業という有様であった（これは全く誇張ではない）。寺子屋を思わせる障子張りの教室の窓を、諸君は想像出来るだろうか。

厳冬の筆山おろしは、破れ障子の穴から情容赦なく教室を吹き貫いた。当時は、廃箱というものは無かった。廃として捨てるものの全くない程の時代であった。しかし、生徒諸君は向学心に燃えて、意気盛んな野育ちの逞しい学生達のキャンパスであった。

当時、校長は故大嶋光次先生。先生は、ガンジーのような痩身に綿綿（けけい）たる眼光を据えて、戦災後の土佐校の復興の為に文字通り骨身をけずる努力をされていた。いくばくかして、校長自慢の現在の校舎が建った。爾後、校長はこの校舎をこよなく愛し、一日三回の見廻りを日課とされていたようだ。落ちている塵を見付けると、授業中の教室であろうとツカツカと這入って黙って拾われたものだ。或日突然、廊下の腰板を蹴破り、こぶし大の穴をあけた生徒に対して、退学を申し渡そうとしたこともある程であった。

――職員室で――

校長曰く、

「高知市在住の先生には、遅刻などほとんど得ない筈である。」

腹心の岩井徳祐教頭曰く、「始業のベルが鳴ったのが聞こえんか！一分たりとも無駄にするな！」（怒鳴る）

二、三人の先生が、バネ仕掛けの人形の如く立ち上がった。

又、日本有数の漢学者である吉本泰喜先生は、優秀な一生徒の漢文の答案に百二十点をつけて、成績報告会議の席上で一歩もゆずらなかった。勇将の下に弱卒なしの感であろうか。

その後、幾星霜。中学県体出場全出場種目優勝。高校野球部の活躍。進学向上。かくて土佐校は、年々歳々、巾広く人材を送り出していった。

社会の目まぐるしい発展に伴ない日本の学生諸君の姿も変わってきた。続発する学園紛争、民主化の叫び、これは自我に目ざめ、自己の思想形成の途上にある学生が現代の教育制度の矛盾を、根本的に解明し、変革しようとする運動であろう。私はこの社会の移り変わりを、唯、形而下の現象のみにとらわれ、学生の内部に流れ移り変わるもの、即ち、何を求め、何に喜怒哀楽を感じているかを、余りにも多く見逃していたことを残念に思う。

現在、本校には被害妄想の学生もいる。しかし、中学生、高校生の人間形成段階の教育においては「対話」こそ大切だろうと思う。もっとも試行錯誤の時代だから一面的にものごとを考えるわけではない。この反論として「対話」は民主主義の絶対的価値基準ではない。民主主義は本来「対話」のもたらす深刻な事態を止揚するための方法的原理である。従って「対話」は欺瞞である。なるほど一般的にはこの様な考えがなりたつかもしれない。しかし、中学、高校の教育段階では人間の「対話」こそ教育であり明るい健全な学園建設の支柱にすべきだと考える。この場においては、本校の教育の方向性、又は目的が学生諸君のそれと不一致の筈はない。

新校舎建築も目前にせまっている。諸君、曽我部校長を中心に「対話」ムードをもりあげて新しい土佐校づくりをしようではないか。

× ×

古本誠実購入
井上書店
定休日　毎週月曜日
高知市帯屋町２の72
TEL ㉒ 3921

あらゆる万年筆
万年筆は　白亞堂
帯屋町東宝会館西　TEL ㉒ 2473

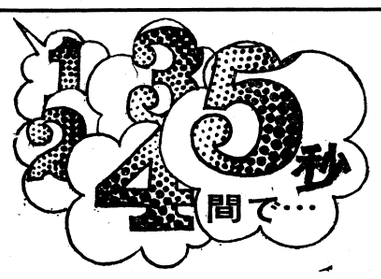
よく揃っている
トクヒロ・レコード店
高知・新京橋・大丸北口西
TEL ㉓ 2050

寿し柳
本店　高知市八百屋町８　TEL ㉕ 0101
別館　高知市掛川町25　TEL ㉒ 8448
支店　高知市帯屋町90（公設市場内）　TEL ㉒ 5373
支店　高知新聞放送会館地下　TEL ㉕ 7004
支店　高知市帯屋町104 文教会館内　TEL ㉕ 0411
支店　スーパー四階食堂　TEL ㉕ 2175

皆様の――――帽子の店
土佐中高指定
元田帽子店
高知市帯屋町２丁目南側
TEL ㉒ 2591

本のデパート・学参専門店
片桐書店
本店　はりまや町・支店五丁目
TEL ㉒ 0935・2774・8583　支店 1032

各種画材
額縁
水谷龍文堂　TEL ㉒0067
高知市帯屋町５４（大劇東）



シートもの、ブックもの……
どんなものでも、５秒間で複写してお渡しします。
書籍・楽譜・講義ノート・教材テキスト・テスト問題

どんなものからでも
電子リコピーでOK！
電子リコピー サービスショップ
山元文具事務機部
高知市梅ノ辻八番十二号
TEL 代表 ㉓ 3101

新築落成に・ご婚礼用ご出産用に……
祝餅・赤飯・饅頭
創業明治二十年
老舗　中納言
本店　大橋通り ㉒0573 ㉓2490
潮江店　天神町 ㉕2979

新学期用参考書は　２階売場
明文堂
ニューコーチビル西端
TEL ㉒6395 ㉓6956
ベストセラーズの受験研究社版
高校自由自在　高校標準問題集
中学自由自在　中学標準問題集
中学実力教室